

(続) 七十代の幸せについて

廣岡 一男

まえがき

もう一年半余も前になるが、「たつみ」誌第二十一号に掲載されたこの拙文に対し、当時私の予期以上の反響があったので、それに張り合いを得て引き続き続稿を書きたいと思っていたが、次のような事情で、どうにも筆を執る気になれなくなった。

と云うのは、ご記憶の方もあろうかと思うが、私のよく知っている限りで「最も恵まれた人」として菊池輝男・木畑龍治郎・田宮正遠の三君を挙げたのであるが、その木畑君の奥様がその後間もなく脳出血で急逝された。僅か一週間程の患いだったそうで、突然愛妻を亡くした同君の胸中は察するに余りあり、私には慰めるべき言葉もなかった。まして七十代の「幸せ」について触れるような事は到底できなかった。

しかし、木畑君はその後私たちの期待通り次第に立ち直ってくれた。そしてもう全く元の木畑君に戻り、この間の東京支部秋の例会にも元気で出席し私たちを喜ばせてくれた。

その際は思いきってこの続稿について話したところ、即座に快く諒承してくれましたので、私も何の懸念もなく筆を執り得ることとなった次第である。

幸せの物差し(ものさし)

幸せの度合いを測るのに絶対不動の尺度は無いと思う。前回の拙文では、私は私なりに熟考の上次の七項目を挙げ、便宜上一〇〇点満点として各項目に割り振って見たのである。

- 健康 一七点
- 妻 一七点
- 友人 一五点
- 趣味 一五点
- 子と孫 一二点
- 住居 一二点
- 資産 一二点
- 総計 一〇〇点

しかし各人各様それぞれ意見の異なるのは当然であり、前記項目の挙げ方について、或はウェイトの置き方等について種々の異見があるものと予期していた。以下その反響の一部を、私見を交

えながら書き綴ってみたい。尚、如何に親しい間柄とは云え、無断で名前を出したり、私信の一部分を公表させて貰った事については、どうかご寛容を乞う。

妻について

われわれ明治の男には、妻のことはどうも口にしにくい。心の中では有難いと思っても、それを妻に面と向って云うことは勿論、第三者に対して発表することも仲々できないものである。

ところが、わが友菊池輝男君は書状で、「……七項目については異存はないが、その点数については、趣味から四点削り、健康と妻に二点宛加え夫一九点としたい。

妻に二点加えたのは、広岡君と同様、女房なしでは一日も生きて居られないだろう。若いうちは暴君でカラ威張りしたものが、現在ではそうでもない。女房は結婚以来健康で一度も病氣したことがないし、それに小生には従順である。のろけになつて恐縮だが、どちらが先に逝つても両者とも現在の幸福な生活は続けられないと思う。

健康と相対して女房は小生にとつて幸福の第一義である。敢えて二点

を加えた所以である。(原文のま、)と率直に述べ、田宮正遠君も極めて簡単ではあるが、「妻の十七点、これは俺は無条件で満点をやる」と書いていた。

友人について

友人について余り反響がなかったのは些か意外であったが、私などは寂しがりやのせいとか、年と共に親しい友のことが益々大切に思われてならない。暫く会わないと「おい、変りはないか」と電話をくれたりすると、とても嬉しく有難いと思う。遠方の友からの便りもうれしい。私は良き友人に恵まれ、本当に幸せだと感謝している。

この年配になると、新たに真の親友を得ることは先ずあるまい。それだけに私は数少ない旧友親友がいつまでも元気でいてほしいと念じ、その健康を心から祈っている。

トタン屋根と山茶花

歩いて十分程の近所にNさんの家がある。銀行上りで私より少し年長

いちまいの写真

十河 ヒロ子



家へ走り帰ったのです。家に帰りつくと火の手が大きくあがるのが二階から見え、おそろしく、両親が「はよ帰って来てよかった」と云つたのを思い出します。

これは、焼き打ちの三ヶ月前の写真で、同商店全盛期時代のもので、当時、女学校を出て勤める人は数少なく、恥しくて娘にも最近まで見せなかつたものです。写真のうしろの中央にいられるのは貨物課でお世話になつた藤川さん、課中で最も一番お口の悪い方でしたがよいお方でした。

(故十河一正氏夫人)

Nさんの家は角地(かどち)なので、庭をつぶしてガレージにしている。乗用車一〇台を収容できる大きさで、月々相当の収益があるらしく、経済的には余裕綽々たる暮らし向きのように見受けられる。

しかし、碁を打つ座敷の直ぐ目の前が殺風景なトタン屋根である。毎日朝に夕にトタン屋根と睨らめつこの暮らしなど私には到底我慢できない。私の住居には狭いながらも庭があり、今は山茶花が真っ盛りだし、小菊なども咲いていて眼を楽

菊池・田宮両君も夫々八〇点、七六点という辛さであった。宇津木君は「……漸く順調に進んでいるかと思うと予期せざる事態が起り、うまく行かない。然し少しも介意せず、それはそれなりに対応して暮している」と力強い信念を感じさせてくれたし、また田宮君は「……俺を九〇点以上に見た君は大分甘かつた様だ。しかし総じて俺の人生は幸福だ。自分で思えるのは有難い」と、悟りきつた心境を披瀝してくれた。

私はここで私のモットーとする「年はとつても年寄りになるな」の一句を附記したい。年寄り臭くならず、いつまでも若々しい心、豊かな心を持ち続けたいものである。

最後に、拙文に対し夫々ご感想やご意見を寄せて下さった諸兄に深謝の意を表すると共に、ご多幸を祈る次第である。

(五〇・一一・三〇)

むすび

当時、数名の諸兄から自己採点の結果を寄せられたが、総じて辛いものであった。私が九〇点以上とした

大正七年八月十二日、焼き打ちにあつた鈴木商店に英文タイピストとして勤めていたころの私です。世にいう米騒動のクライマックスである鈴木商店の焼き打ちの日、おそわれることが判つてから、早く帰るよう命ぜられました。

いち早く、私は自分の責任あるタイプライターを何よりも大切に感じ、人力車を頼み、湊川神社近くのがわ

